

# 種子島・屋久島における法華宗の復興について

—本能寺史料「種子島・屋久島巡廻布教紀行」を読む—

栗林 文夫

はじめに

平成十（一九九八）年の鹿児島県内の仏教系宗教法人数について、包括団体別にみると、天台宗二、高野山真言宗十四、真言宗醍醐派二、東寺真言宗一、真言宗御室派一、真言宗九州教団一、中山身語正宗十、光明念佛身語聖宗二、浄土宗十四、浄土真宗本願寺派一六九、真宗大谷派七十七、真宗高田派四、真宗興正派二十五、真宗仏光寺派二、真宗木辺派十六、時宗一、臨済宗妙心寺派一、臨済宗相国寺派二十九、曹洞宗十五、三宝教団二、日蓮宗四、日蓮正宗九、法華宗（本門流）<sup>①</sup>二十八、単立三十五で、合計四六四法人を数える。<sup>②</sup>このうち、浄土真宗系の法人数は二九三あり、全体の六十三・一パーセントを占めており最も多いのが特徴である。

次にこの統計を、二島という地域に限定して改めて見直してみると、浄土真宗本願寺派六、真宗大谷派二、真宗興正派一、真宗木辺派一、日蓮宗一、日蓮正宗一、法華宗二十三、単立一となり、合計で三十六法人を数える。このうち浄土真宗系の法人数は十あり、全体の二十七・八パーセントになる。法華宗は二十三で、全体の六十三・九パーセントとなる。<sup>③</sup>同宗は県全体で二十八あるうちの実に二十三（全体の八十二・一パーセント）が二島地域に集中していることになる。

薩摩藩<sup>④</sup>の廃仏毀釈は幕末から明治初めにかけて実行に移されていったが、当時あった一〇六ヶヶ寺全てを廃寺にし、僧侶二九六四人全てを還俗させた。<sup>⑤</sup>史上稀に見る徹底ぶりであった。そのため廃仏毀釈を境にして前と後では寺院の宗派の様相が全く異なるが、二島だけは実は江戸時代までの状況とかなり似通っているのである。何故このような現象が起こったのであろうか。

以下本稿では、この法華宗が廃仏毀釈を経たにもかかわらず、現在でも二島地域に集中して存在する歴史的背景を、廃仏毀釈後の布教活動を再検証しながら明らかにしていきたい。

## 一 二島の中近世寺院の特色

種子島・屋久島・口永良部島三島（以下、「三島」と略記する）における中近世の寺院は、南九州のなかでも極めて特徴的である。それは三島に存在する寺院全てが法華宗であったということである。そもそもこの三島は律宗一色の島であったが、種子島出身の林応が尼崎本興寺の日隆に師事して日典と改名し、同島に帰って法華宗を伝道したが、寛正三（一四六二）年島民に殺されてしまう。その後同六年に日典の弟子日良が種子島へ下向して布教を行い、領主種子島氏を教化することに成功し、

文正・応仁年間（一四六六～一四六九）に三島が悉く法華宗となった（皆法華）。この年代が明記された史料は見えないが、『三國名勝図会』は文明元（一四六九）年頃と推定する。同年には種子島氏の菩提寺本源寺も建立され、やがて三島の津々浦々に百余りの寺院が建立された。<sup>6</sup>

三島に広まった法華宗は本門流で、教学の道場としての尼崎本興寺と布教の道場としての京都本能寺を両本山と仰ぐ。中近世を通じて両寺と三島の交流は継続されていた。それは十六世紀前半、管領細川晴元が種子島から鉄砲が到来したことを本能寺に感謝し、種子島へも書状を遣わしたことを述べた書状が本能寺に残っていることから理解できよう。<sup>7</sup>法華宗改宗後、同宗を介しての種子島と畿内とのつながりは深くなり、両者間の往来は活発になっていった。<sup>8</sup>

近世になると寺院の数は更に増加していった。三島全ての寺院に関しては史料がなく不明であるが、今史料が残っている種子島を例にその特徴をまとめてみよう。

すなわち種子島の寺院は、①赤尾木三箇寺、②種子島廿七寺、③村落小坊の三種に分類される。①は領主種子島氏の居館があった赤尾木にある寺院で、同氏の菩提寺本源寺（一五〇石）、祈願所の慈遠寺（百石）、大会寺（五十石）を指す。領主と密接な関係にあり、石高も他の寺と違い格段に多かった。本山京都本能寺と尼崎本興寺の直末寺でもあった。②は全島十八ヶ村それぞれの村ごとに一～三ヶ寺ずつ分散して所在し、一～十石程度の少額の石高が領主から与えられていた。③は②の周辺にあり、②と本末関係を結んでおり、無高であった。文化十三（一八一六）年には一八〇ヶ寺あった。<sup>9</sup>

近世初頭の本能寺直末寺は、畿内二十一ヶ寺、瀬戸内諸国二十九ヶ寺、山陰二ヶ寺、北陸十六ヶ寺、伊賀七ヶ寺、九州十九ヶ寺の合計九十四ヶ寺が確認できる。これらの寺院は、京都から淀川水系を下って大阪湾岸、淡路を経て瀬戸内の南北岸、九州東岸を南下して種子島に至るラインに分布している。京都から瀬戸内を西へ走って南西諸島に至る商品流通のルート、すなわち中近世の西日本の経済大動脈を支配した商業資本と結びついて教線を伸ばしたのが本能寺門流であったといえる。主要な末寺はこのルート上の港市に所在し、開基・外護者には豪商や港市の領主が多かった。戦国時代末期、種子島に伝来した鉄砲の畿内流入について、種子島に末寺を擁した本能寺がいち早く重要な役割を果たしたのは、このような理由からであったと言われる。<sup>10</sup>

ところで、種子島出身で本能寺の貫首になった僧侶には、十五日達聖人（万治三（一六六〇）年七月一日遷化）、二十一世日達聖人（宝永四（一七〇七）年十一月二十七日遷化）、二十四世日達聖人（享保十四（一七二九）年九月二十日遷化）、三十五世日達聖人（寛政三（一七九二）年八月十一日遷化）の四人が確認できる。<sup>11</sup>このように種子島は経済的にだけではなく、僧侶の供給先としても本能寺にとって重要な存在であった。

三島で二百ヶ寺を越す寺院を維持していくことは、種子島氏にとって経済的に厳しい問題であった。それは維持が困難になった寺院の整理が、文化五（一八〇八）年八月の種子島久柄口上覚に見え、翌月十三日付けで寺社奉行から許可を得たことからも分かる。<sup>12</sup>薩摩藩のなかでも極めて早い段階での寺院整理といえる。更に同七年九月には、島中には寺院が多く民衆の負担になるからという理由で、本源寺坊二軒・慈遠寺坊二軒

等合計二十六宇を破壊している<sup>(14)</sup>。十九世紀初めに種子島で起こった寺院整理は、領主権力が経済的負担に耐えきれなくなった所に原因があった。

その後幕末になると、藩全体の廃仏毀釈の巨大な流れの中に呑み込まれていくことになる。すなわち慶応二（一八六六）年八月二十八日には、藩当局が島中の寺院数、僧侶数とその年齢を調査させたことが史料に見えるが<sup>(15)</sup>、これは廃仏毀釈を実行に移すための予備調査と位置付けられる。同年中には、台運院坊・中之坊・大聖寺等合計二十四ヶ寺が廃寺になるが<sup>(16)</sup>、先に見た種子島寺院の三類型の内の③村落小坊から廃寺が始まったといえる。明治元（一八六八）年十二月には、西面村妙泉寺が破壊され、同寺の旧材で内城に軍局を造った<sup>(17)</sup>。島内の寺院は次々に廃寺となり、翌二年、種子島の寺院も含めて藩内全ての寺院が廃寺となった<sup>(18)</sup>。

本能寺の「両山歴譜 日唱本」にはこのことを、「去ル<sup>(明治元年)</sup>巳年薩<sup>(マヤ)</sup>偶<sup>(マヤ)</sup>日三州志摩津家領分下末寺各宗共廢寺廢<sup>(島津)</sup>仏<sup>(島津)</sup>」と簡潔に記すばかりである。

## 二 廃仏毀釈後の法華宗の復興

薩摩藩での廃仏毀釈について、本能寺に残る別の史料には、「明治三年薩<sup>(マヤ)</sup>偶<sup>(マヤ)</sup>日三州島津領分下ハ各宗共ニ廢仏廢寺ノ不運ニ遭遇シ、三島開基ノ薰功も一朝ニシテ泡沫ト成ル、再興ハ時ヲ待<sup>(20)</sup>ノミ」と見える。右に見た「両山歴譜 日唱本」と廃仏毀釈が完了した年代が一年違っているが<sup>(21)</sup>、ここには廃仏毀釈を「不運」と認識し、「再興ハ時ヲ待<sup>(20)</sup>ノミ」とあるように捲土重来を期し、復興への並々ならぬ強い意志が感じられる。

さて、明治二年の廃仏毀釈から同九年九月五日の鹿児島県参事田畑常秋による信仰の自由が布達<sup>(22)</sup>されるまでのおよそ七年間、表面上は薩摩藩

（鹿児島県）には寺院も僧侶も全く存在していなかった。復興に向けての具体的な動きが始まるのは信仰の自由布達直後で、本能寺日実による種子島方面の布教が実施された<sup>(23)</sup>。

しかし、「今年<sup>(明治元年)</sup>九月鹿児島県下御一新已來廢仏之処、諸人信仰ニ任スヘキノ令布有之、各宗共同県へ布教ノ思ヒヲナス」とあるように、布教を意図していたの法華宗だけではなく他の宗派も同じであった。仏教信仰の空白地帯といえる鹿児島県での布教を他の宗派も考えていた。

その中で最も積極的に布教活動を行ったのが、江戸時代まで禁制であった浄土真宗であった。同九年十二月に野崎流天が種子島へ渡り布教するが、西南戦争の影響から同十年三月取り押さえられ鹿児島へ護送されている。西南戦争終了後、再び野崎は種子島へ渡り、およそ一年半滞り在して、四五〇戸程の門徒を獲得した。

一方、屋久島へは同十一年九月海瀬探月・長井大宣等が派遣されて布教を行った。その後、一時二島の布教は途絶えてしまったようで、中々順調には進まなかったようである<sup>(25)</sup>。

それでも鹿児島県全体で見れば、浄土真宗の進出は目覚ましいものがあった。同三十一年に刊行された本富安四郎『薩摩見聞記<sup>(26)</sup>』には、「一朝国禁敗れ各宗自由に薩境に入りて競争し得るに至り、勃然として第一に興り来りしは真宗なりき。彼れは今日実に凡ゆる寺院の四分の三を占め、其勢力各宗派に懸絶せり」とある。

また同年執筆の木脇啓四郎の『萬留』にも、「一向宗大流行、鹿児島も両本願寺にてうつつめたり<sup>(27)</sup>」とあって、当時浄土真宗の勢力が県内で最も盛んであったことを知り得るのである。

一方法華宗の側では、同九年に柳田日皓（元正建寺住職）・岩坪東全・

岩坪永須・石堂慈門・日高敬成・岩坪習学・濱田玉然等が種子島各地を回り、活発な再興運動が行われた。まず濱松神社を再び元の日典廟に戻し、川迎・邊泊・池田・州之崎・住吉・浦田・府元では二百戸程の信者を、平山・下中・上中・西之・島間・坂井・野間・増田では一二〇〇〜一三〇〇名の信者を得ることができた。そこで、日皓は宗旨復興を願うため大本山へ向かうが、西南戦争により帰島ができなくなった。戦乱がおさまると、日皓は古森日経（本興寺住職）・牧瀬日秀（誘）（大坂妙堯寺住職）・井原日意等と共に帰島し、川島祥三（日皓の弟子）宅を仮教務院として、二島の各地を布教していった。<sup>(28)</sup>「種子島家譜」同十一年十月十八日条には、「尼ヶ崎本興寺住職古森日経・坂府妙堯寺住職牧瀬日秀来謁献物数品、皆来布日蓮宗也<sup>(29)</sup>」と伝える。

同十二年一月には、本興寺日経等が屋久島へ渡島し布教が実施された。口永良部島の巡教も試みられたが、悪天候で海が荒れ三度渡航に失敗した。<sup>(30)</sup>

同年五月には、牧瀬と法華宗信徒により本源寺の本堂兼庫裡が建立され（春田日皎師宅寄附<sup>(31)</sup>）、同年五月二十一日には仏法会が行われ、種子島氏も金銭の援助を行っている。<sup>(32)</sup>

本蓮寺も同じ年に、平山産の日浩上人を住持とし、日高半十郎の世話で日高勇太郎宅に布教所を設け、山田永寂師も同住した。同十七年に二回移転し教会所を設置した。寺院に昇格したのは昭和二十二年（一九四七）年のことであった。<sup>(33)</sup>

明治十五年四月三日には、本興寺住職桃井日暁の使僧佐藤日徳が来島し、菓子一包みと日暁の書翰を呈した。使僧の日徳は今回の種子島布教を担当した。<sup>(34)</sup>

同十七年三月には、本興寺は信隆日秀・佐藤日省を鹿兒島・二島に派遣し、法華宗の教線回復に努めさせた。この時、本源寺が復興され、国上村・安納村・安城村・住吉村・野間村・平山村・荃永村・西之村・坂井村・増田村・島間村の十一ヶ所に法務場が置かれた。<sup>(35)</sup>同年九月に、本源寺表門が新築されるが、翌年八月十五日、火災により同寺は全焼してしまう。同寺本堂兼庫裡が再建されたのは同年十二月で、種子島家住宅の寄附によつてであった。<sup>(36)</sup>

同十八年になると屋久島の原の本住院、栗生の本寿寺跡に種子島本源寺の説教所ができ、またこれと相前後して、宮之浦久本寺、安房の本仏寺、永田の顕寿寺、楠川の本蓮寺、小瀬田の光照寺、麦生の本慶寺、原の永昌寺などが寺号を冠した布教所または説教所として復興されていった。<sup>(37)</sup>

同三十年には、宮崎市に吉祥寺説教所（現妙経寺）が創立され、また谷日昌による熊本市久本寺復興が図られ、九州南部での教線回復に力が注がれた。<sup>(38)</sup>この延長上に翌年の谷日昌等による二島を巡教して法運再興を企てる動き（次章で検討する「種子島・屋久島巡廻布教紀行」に見える布教）が位置付けられる。二島の弟子四〜五名を淡路名勝寺に伴い予備校を設けて三年間教育した。

「両山歴譜 日唱本」はこのことを、「其前<sup>(明治三十一年)</sup>年薩摩三島ニ於ケル定源院日典大正師日良法印ノ事蹟ヲ巡回セリ、惜哉、明治維新後廢仏毀釈ノ不幸ニ遭遇、其ノ不運ヲ悲ミ、之レノ再興ヲ企画スルニハ、先ヅ三島出身ノ児童ヲ養成シ、教育スルニ如カズト考慮シ、四五名ノ児童を連れ帰ヘリ、其他ヨリモ児童ヲ申受ケ、此等ノ為ニ自資ヲ投ジ、門末寺院有志者ノ同情ヲ得テ予備校ヲ設立セリ」と伝える。

また同年十二月本源寺住職岩坪永順により、二島の檀方戸数の書上が作成されているが、<sup>(39)</sup>それによれば、種子島には一六〇九戸、屋久島には五六九戸、二島併せて二一七八戸あった。檀方はそれぞれ一定数の法務場に分かれ、花香番・惣代などの役を担当する信者が二〜三名決められている。法務場に属する檀方戸数は九〜二六八戸と様々の規模がある。この檀方戸数書上は、翌年実施される二島巡廻布教のための予備的な調査であったのであろう。

### 三 「種子島・屋久島巡廻布教紀行」を読む

#### (1) 構成

まず、これから使用する史料「種子島・屋久島巡廻布教紀行」(以下「紀行」と略記)の構成から確認しておきたい。本史料は次のように①から⑦により構成されている。

- ①明治三十一年八月三十一日から十一月十日までの、二島での巡回布教を記した部分で日記の体裁をとる。分量的にも最も多く全体の約七割強を占めている。随行員の岡純了が書いた部分である。
- ②「日典大正師石碑ノ写」。宝永七(一七一〇)年十二月中旬に建て替えた日典の石碑と、正徳六(一七一六)年四月二十一日に高尾野新助盛庸により建立された先祖山崎筑前盛遠の石碑の碑文を収める。
- ③日良上人碑銘文。元禄八(一六九五)年九月十九日、勸進沙門実相院日珠により建立され、施主として「僧俗男女都合九百三十一人」と見える。
- ④明治三十一年十一月二十三日付け熊本市久本寺住職谷日昌書翰。谷

は既に①を上申ししていたが、その写本が出来たので直ちに送った。そして今また「卑見上申並二情願の書類」を上申するので、採聴してもらおうよう両大本山執事御中に懇願したものの。

⑤同年十月七日付けの種子島僧侶集会での七ヶ条に渡る決定事項。本源寺前任岩坪永順他十一人の僧侶の連署がある。更にその奥に両本山布教員谷日昌が署名して、議決が確かであることを証明している。

⑥「薩隅布教ヨリ起リタル鄙見ノ儘上申」・⑦「鹿児島布教ニ就テノ情願」。⑥⑦は一体で、同年十一月二十三日付け谷日昌が書き、両大本山執事に対して提出している。この「紀行」のなかで、分量は①に比べて少ないが、最も核心的な部分になり、谷日昌の考え方が如実に語られている。

#### (2) 主な登場人物

谷日昌は明治三十一年当時熊本市久本寺住職で、両本山布教員。この二島巡回布教の旅で中心的な役割を担う人物である。安政四(一八五七)年十月二十五日、讃岐国三豊郡萩原村の谷典平の三男に生まれ、十一歳の時得度する。字を真了と言ひ、真珠院と号した。明治十一年淡路国釜口泉住寺に住し、同十六年山命により熊本市に布教する。同二十九年、単称日蓮宗(清正公本妙寺)と法義で衝突し、大討論会を開催する予定であったが先方が応じず、この時『題目鉢内本迹論』を刊行している。その後、釜口妙勝寺在任中に二島に巡廻布教したことをきっかけに四、五名の児童を連れ帰り、彼らのために自費を投じて妙勝寺に予備校を設立した。この時の教授等は無報酬で、児童等の生活費として所得のなかから投資し、薪木などは寺所有の山林より切り出し、学

生を養教育すること三年に及んだ。その後この予備校は、本興寺中の西高に合併した。昭和十六年八月四日、八十四歳で遷化した。本能寺第六十一世となり、日昌聖人と呼ばれる。「行学兼備近世希有ノ高潔ニシテ、温容謂フベカラザル威嚴アリ、実ニ宗門ノ偉人ナリ」と評されている。

川添秀妙は出水麓町本光院院主。今回の布教に先立ち徒弟の恵音を三島に遣わし普く視察させ、布教には自身も六十日間に渡って同行し苦労をとにもした。

随行員の岡純了は、日向を出発して鹿児島で一行に合流した。

前田勘之助は本光院檀越で、家族が制止するにもかかわらず、布教師の一行を追尾し、布教に随行することを認められた。種子島の布教がほぼ終わった十月三日に一人先に鹿児島に帰っている。

山田永叔は種子島の本源寺住職で、六十日間の布教に随行し諸般に渡って尽力した。その賞として「集解卒」くらいに拔擢して欲しい旨、谷が上申している。

川内在住の嬉野猪ノ八は、九月八日に剃髪得度して「勘了」に改名し、種子島に渡るが本源寺で留守を守る。嬉野以外五人で種子島を巡回、屋久島は嬉野・前田を除く四人で巡回布教している。

### (3) 日程

明治三十一年八月三十一日から十一月十日にかけて書かれた「紀行」の布教の日程は「表一」の通りである。

種子島では西之表を基点にして海岸部を時計回りに、屋久島では宮之浦を基点にしてこちらも海岸部を時計回りに移動している。移動手段は、馬車・汽車・汽船・舟など特記した場合を除けば、基本的に徒歩である。

現在に比べれば道路事情も極めて劣悪であり、毎日毎日徒歩で移動して、移動先で説教をして、また次の場所へ移動するという日々であった。自らの宗派を布教するという理想に燃えた非常に力強い意志が感じられる。

〔表一〕布教の日程一覽

月・日	出発地	経由地(滞在地)	到着地
八・三十一	熊本市内	(汽車) ↓ 松橋 ↓ (汽船) ↓ 米ノ津 ↓ (馬車)	出水麓町本光院移転事務所
九・一、四	出水麓町	出水麓町	川内町瀬下屋
九・五	川内町	(馬車) ↓ 野田村餅井駅 ↓ (馬車)	鹿兒島市山下町
九・六、七	川内町	(汽車) ↓ 市来	
九・八	川内町	鹿兒島市堀江町	
九・九		鹿兒島市荒田町正建寺旧跡	
九・十		往來なし	
九・十一		鹿兒島市妙頭寺跡 ↓ (汽船)	
九・十二	種子島西ノ表		本源寺
九・十三、十四		西ノ表本願寺説教所	
九・十五、十六		満徳寺跡 ↓ 種子村沖ガ浜田	
九・十七		本蓮寺	
九・十八	安納		安納法務所
九・十九	現和村		現和村
九・二十	安城上ノ町		安城上ノ町法務所
九・二十一	立山		立山
九・二十二	増田		増田法務所
九・二十三	野間		野間法務所
九・二十四	野間	田島法務所 ↓ 阪井	田島法務所
九・二十五	田島	熊野海岸 ↓ 千座ノ岩屋	平山法務所
九・二十六	平山		平山法務所
九・二十七	茎永		茎永法務所
九・二十八	下中		下中
九・二十九	西野		西野法務所
九・三十	上中		上中法務所
十・一	島間		島間
			安宅磯法務所

十二	安宅磯	深川	浜津脇駅
十三	浜津脇駅	住吉法務所	住吉法務所
十四	住吉	能野法務所	能野法務所
十五	能野	日典方浜	川迎法務所
十六	川迎	本源寺	本源寺
十七	本源寺	国上	国上法務所
十八	国上	本源寺	本源寺
十九	国上	本源寺	本源寺
二十	国上	本源寺	本源寺
二十一	国上	本源寺	本源寺
二十二	国上	本源寺	本源寺
二十三	国上	本源寺	本源寺
二十四	国上	本源寺	本源寺
二十五	国上	本源寺	本源寺
二十六	国上	本源寺	本源寺
二十七	国上	本源寺	本源寺
二十八	国上	本源寺	本源寺
二十九	国上	本源寺	本源寺
三十	国上	本源寺	本源寺
三十一	国上	本源寺	本源寺
三十二	国上	本源寺	本源寺
三十三	国上	本源寺	本源寺
三十四	国上	本源寺	本源寺
三十五	国上	本源寺	本源寺
三十六	国上	本源寺	本源寺
三十七	国上	本源寺	本源寺
三十八	国上	本源寺	本源寺
三十九	国上	本源寺	本源寺
四十	国上	本源寺	本源寺
四十一	国上	本源寺	本源寺
四十二	国上	本源寺	本源寺
四十三	国上	本源寺	本源寺
四十四	国上	本源寺	本源寺
四十五	国上	本源寺	本源寺
四十六	国上	本源寺	本源寺
四十七	国上	本源寺	本源寺
四十八	国上	本源寺	本源寺
四十九	国上	本源寺	本源寺
五十	国上	本源寺	本源寺
五十一	国上	本源寺	本源寺
五十二	国上	本源寺	本源寺
五十三	国上	本源寺	本源寺
五十四	国上	本源寺	本源寺
五十五	国上	本源寺	本源寺
五十六	国上	本源寺	本源寺
五十七	国上	本源寺	本源寺
五十八	国上	本源寺	本源寺
五十九	国上	本源寺	本源寺
六十	国上	本源寺	本源寺
六十一	国上	本源寺	本源寺
六十二	国上	本源寺	本源寺
六十三	国上	本源寺	本源寺
六十四	国上	本源寺	本源寺
六十五	国上	本源寺	本源寺
六十六	国上	本源寺	本源寺
六十七	国上	本源寺	本源寺
六十八	国上	本源寺	本源寺
六十九	国上	本源寺	本源寺
七十	国上	本源寺	本源寺
七十一	国上	本源寺	本源寺
七十二	国上	本源寺	本源寺
七十三	国上	本源寺	本源寺
七十四	国上	本源寺	本源寺
七十五	国上	本源寺	本源寺
七十六	国上	本源寺	本源寺
七十七	国上	本源寺	本源寺
七十八	国上	本源寺	本源寺
七十九	国上	本源寺	本源寺
八十	国上	本源寺	本源寺
八十一	国上	本源寺	本源寺
八十二	国上	本源寺	本源寺
八十三	国上	本源寺	本源寺
八十四	国上	本源寺	本源寺
八十五	国上	本源寺	本源寺
八十六	国上	本源寺	本源寺
八十七	国上	本源寺	本源寺
八十八	国上	本源寺	本源寺
八十九	国上	本源寺	本源寺
九十	国上	本源寺	本源寺
九十一	国上	本源寺	本源寺
九十二	国上	本源寺	本源寺
九十三	国上	本源寺	本源寺
九十四	国上	本源寺	本源寺
九十五	国上	本源寺	本源寺
九十六	国上	本源寺	本源寺
九十七	国上	本源寺	本源寺
九十八	国上	本源寺	本源寺
九十九	国上	本源寺	本源寺
一百	国上	本源寺	本源寺

(4) 廃仏毀釈の現状

鹿児島県では明治三十年代になっても廃仏毀釈の爪痕は生々しく各地

に残存していた。同三十一年に刊行された本富安四郎の『薩摩見聞記』には当時の状況が記されている。

すなわち仏教は最も盛んであったが、他県と比べるとその数は僅少で、寺院の数も全国最小数であった。また鹿児島には東西本願寺別院や不断光院のように見るべき寺院も少しはあったが、鹿児島を出ると説教所と呼ぶようなものしかなく、寺院の体裁をとるものは稀であった。

県内を巡覧すると、到るところの丘頭や田んぼの中にうち捨てられた墳墓があり、石碑は倒れたり砕けたりしたものが多く、あるいは草がぼうぼうとして生い茂って荒れ果てている、このような状況であったという。

しかし、同九年に信教の自由が県庁から布達されてから以降、浄土真宗の僧侶達を中心に布教が進められ、全般的に仏教の信徒と寺院数は年々増加しているという。

次に「紀行」中の記述から廃仏毀釈後の事例を見てみよう。

① 鹿児島市荒田町正建寺旧跡

九月十日に荒田町の本長山正建寺旧跡に詣でて、多くの墳墓の中から歴代住職の墳墓を探すが発見することができなかったことから、旧檀家を訪ね歴代の墓まで案内を請うている。

『三国名勝図会』巻之六によれば、正建寺は法華宗八品派で武村にあり、本能寺と本興寺の直末寺であったという。三十石の寺領を有し、三州一國触頭の地位にあった。なお同寺は現在、鹿児島市下荒田一丁目に復興されている。

歴代住職の墳墓は皆縦横に倒れ横たわり、草や蔦がからまりついて判別することができなかつた。墓石を引き起こし、土や塵を払って文字を

読むと四、五人の歴代の名を知ることができた。

一行が鹿児島にやって来て初めて目撃した廃仏毀釈の痕跡であったことから、「衆皆感慨ニ打タレ、只夕嗚呼くト大息ヲツキ、題目ノ声モ湿リ勝」で、読経回向の後宿所に帰っていった。

### ② 鹿児島市坂本村妙顕寺跡

同十二日、一行は鹿児島市にある法華宗のもう一ヶ寺である一乗山妙顕寺跡を訪れている。この寺院は『三国名勝図会』巻之六によれば、坂本村若宮神社の左にあったとある。本能寺・本興寺の直末寺で、寺領は百石を有していた。妙顕寺跡を詣で、塚の間を探し回るが歴代住職の墳墓は見つからず、通路の石段に「宗祖御塔ノ断片」が挟み込まれていた、塔の断片が垣根の下石に代用されていたりして、昔の面影もなく一回うち沈んでいる。隣地にある若宮神社には仏寺に関係する物が多く残っていたという。これらは妙顕寺が廃寺になる際に、隣の若宮神社に運び込まれたものであろうか。

### ③ 種子島安納本蓮寺跡等

同十八日種子島安納において本蓮寺と別の二ヶ寺跡を見ている。本蓮寺は大会寺の末寺で寺領は五石であった。境内は広く、巨木が鬱蒼として生い茂り、大きな宝塔は倒れ三宝（仏の異称）はどこも埋められていた。「古跡歴々指黙スベシ、清風長ヘニ吹テ、靈氣人ニ迫ル」雰囲気であった。このような場所は多く見られたようで、「一々記載スル能ハス、漏ル、モノ多シ」と述べられている。

### ④ 日典大正師石碑

現日典寺境内の日典廟にある石碑の文字が削り取られていたという。すなわち「正面ニハ 妙法 日典大正師位」とあり、「此表面ノ字ハ現

今墨書ナリ、聞クニ廃仏難ノ時迷徒ガ刻字ヲ削リ潰セシヲ以テ、今此クノ如キ也」という状況であった。

総じて「紀行」の中には廃仏毀釈の記事が少ない。二島を六十日間にわたって布教をして回ったのであるから、相当数の廃寺の痕跡を見ている筈であるが、全体としては布教の記事が中心を占めている。廃寺の数が多すぎて余りにも日常的になってしまったのかもしれない。

### (5) 布教の形態

一行は二島においてどのようにして布教を行ったのであろうか。既述のように、明治十七年に本源寺が復興され、国上村・安納村・安城村・住吉村・野間村・平山村・荃永村・西之村・坂井村・増田村・島間村の十一ヶ所に法務場が置かれていた。

この本源寺が布教の中心的な役割を担っていくことになる。すなわち、一行が種子島に到着した九月十三日に、「本源寺ヨリ種（種子）益（屋久）両島各法務所ニ布教師ノ来島ヲ通報ス」とあるように、本源寺から各法務所に連絡がなされていたことがわかる。

法務所は法務場とも呼ばれ、概ね村単位で設置されていたようである。つまり、かつて法華宗の寺院が所在した場所で、未だ寺院が復興されていないことから、寺院の替わりとして法務所が置かれたものであろう。「紀行」に見える法務所は以下の通りである。

【種子島】安納法務所（有村智顕）・現和法務所（河野永昌）・安城法務

所（小山永伯）・増田法務所（日高泰禎）・野間法務所（上

妻智応）・田島法務所・平山法務所・荃永法務所・西野法務

所・上中法務所・安宅磯法務所・住吉法務所（石堂慈門）・



能野法務所・川迎法務所

【屋久島】宮之浦法務所（上妻泰誠）・楠川法務所（名古屋智慶）・安房

法務所（徳永永学）・原法務所（鎌田智教）・栗生法務所（宅

間琢善）・永田浜法務所

これらの法務所には担任の僧侶が決められており、ゴチック文字の法務所の僧侶は十月七日の種子島僧侶集會に参加した人物である。その際の決定事項を記した文書の奥に十人の僧侶が連署し、その筆頭に本源寺前住岩坪永順と本源寺現住山田永叔とが署名捺印をしている。このことよって、二島における本源寺の位置付けを明確に読み取ることができ。すなわち、本源寺を頂点にしてその下に二島に法務所を設けて、地域においては各法務所が中心となり布教活動を行っていた。布教師達一行はこの組織を最大限に利用することよって短期間で、しかも二島全島に渡る広範囲をスムーズに布教することが可能となったのである。

（6）毎日の説教での聴衆の数

二島を巡回し各地で毎日のように説教を行っている。以下では聴衆の数が具体的に把握できる事例を取り上げてみたい。

〔表二〕説教の場所と聴衆の数

月・日	場所	人数
九・六	川内町嬉野猪ノ八氏宅で法話会	三十余名
九・七	川内町	五十余名
九・九	米村氏宅で法話会	十余人
九・十四	本源寺	一三〇名
九・十七	沖ガ浜田の古田嘉助氏宅（説教所） 安納の信徒鎌田正三氏宅	三〇〇人（含子供） 一五〇許

九・十八	現和村竹田伝十氏宅、学校教員・医士等も皆来聴	二五〇名
九・十九	安城上ノ町法務所、昼食後遠藤伊左衛門氏宅で開筵	一五〇名許
九・二十	立山	一〇〇余名
九・二十一	増田法務所	三〇〇余名
九・二十三	野間法務所	二〇〇余名
九・二十四	田島法務所、信徒山口周兵衛氏宅で説筵	一〇〇余人
九・二十五	平山法務所、担任高田誠環師	二〇〇余名
九・二十七	下中	六十人許
九・二十八	西野法務所	三〇〇人
九・二十九	上中	五十名許
九・三十	島間	七、八十名
十・一	安宅磯、長浜休八氏宅	五十名
十・二	浜津脇駅、浜田虎次郎氏宅	一五〇名位
十・三	深川↓住吉法務所	一〇〇名
十・四	能野法務所、信徒日高伴次氏宅で開筵	一五〇名
十・八	国上法務所、有村智顕師担任	一五〇許
十・九	同右	一五〇余人
十・十三	本源寺で説筵	七、八十名
十・十六	宮之浦法務所	二〇〇余人
十・十七	夜開筵	三〇〇人
十・十九	楠川法務所	二〇〇人
十・二十	小瀬田の安藤多吉氏宅	五十名余
十・二十二	安房	七十名余
十・二十四	原、説筵	一五〇名
十・二十六	栗生法務所、羽生平兵衛氏宅に開説	一五〇名
十・二十七	栗生	一〇〇有余名、後に大分増加
十・二十八	栗生	二五〇余名
十・三十	永田浜、渡辺儀八氏宅にて開説	一三〇名
十・三十一	永田浜	一〇〇余名
合計		四九九〇人余

聴衆の合計は実に延べ四九九〇人余に上る。もちろんここに上げられた聴衆の数はあくまでも記録された概数であって、正確ではなかったかもしれないが、ここには江戸時代までの伝統から潜在的に法華宗信者が多く存在していた状況が見えてくる。この点に以後の法華宗布教の必要

性が存しているのである。

### (7) 浄土真宗・キリスト教への危機意識

二島を巡回布教する途中、浄土真宗に対する記述がしばしば見受けられる。この頃既に浄土真宗は鹿児島県内に相当数の信者を獲得しつつあったことから、法華宗布教師達は警戒感を露わにして、法問を挑んでいた記事がある。

九月十五日と十六日の二日間にあつて、西ノ表本願寺説教所において岡・前田・嬉野三人と本願寺の僧侶との間で、両宗で異なる教義の理解について激しい問答が行われている。結局両宗とも自説を曲げず、平行線のままの形で終わることになり、法華宗側が「今日モ開説シ、此応答ノ始末ヲ報導シ、貴宗ノ違義ヲ批判スル故、御来光ヲ望ム」と言うこと、浄土真宗側も「自分方モ説教アル故、此事不協」と言い捨てて帰っている。実際に、法華宗側はその日の説教で「真宗ノ謗法ヲ説示」している。このように法華宗側の布教師達は浄土真宗に対する敵対心を有していたが、二島における浄土真宗の広がりには実際のところどのようなものがあったのであろうか。

種子島における浄土真宗の布教については既述の通りであるが、当初は西之表に布教所を設立し、甌島からの移住者（彼らは浄土真宗も甌島から種子島に持ち込んでいる）への布教活動を中心におこなっていた。<sup>(4)</sup>

「紀行」によれば、種子島では野間に浄土真宗門徒が三十戸余りあり、国上には監獄教誨師なる浄土真宗の僧侶がおり、信徒を養成し、早晩一寺を建立せんとする状況であった。従つて、布教師達が国上を訪れると、法華宗の信徒達も競争の念が起り、殊に布教師一行を歓迎した。

午後の説教では、「ドノ講師モ熱心ニ真宗ヲ摧破シ、又神道ヲ折破」した。信徒達はまるで「早魃ニ膏雨ヲ得シ如ク大喜ビニテ、今一日留テ布教セラレン事ヲ懇請」したという。

次に屋久島に目を転じてみると、「紀行」によれば、粟生には西本願寺の説教所があり、檀家が八十余戸あった。永田浜では浄土真宗の「宏壮美麗ナル説教所」があり、浄土真宗の勢いは盛んであった。一湊では二百戸の戸数悉くが浄土真宗門徒で、「昔時ヨリ村民窃ニ真宗ヲ信シ、禁制ヲ潜リテ、或ハ船中ニテ説教ヲ開キ、或ハ無人ノ境ニ開キ、強信シタリシモノ維新後ニ至リテ公然真宗信徒ヲ表スルニ至」った。東本願寺派の説教所があり、志戸子村は戸数六十戸で皆浄土真宗を信じていた。興正寺派説教所は、随分宏麗であつたという。

浄土真宗の門徒は種子島に比べて屋久島が多かつたようである。特に一湊のごときは注目に値しよう。中世後期から江戸時代を通して、三島は完全に法華宗のみと思われがちであるが、本土の諸地域と同じように、所謂「かくれ念仏」の形態での浄土真宗の信仰が維持・継続されていたのである。そのために、明治になつて信教の自由が発令されるといち早く浄土真宗が広まつていたのであろう。

また浄土真宗の他にもキリスト教も広まりつつあつたようである。種子島安宅磯において、近年米国から帰国した一壮年がおり、キリスト教を信仰していた。この男は最近「青年会」を組織して、人びとをキリスト教に勧誘しようとしていた。

このように浄土真宗とキリスト教が次第に広まりつつある状況について、「嗚呼種子島ニ長キ眠ヲ貪リツ、アル緇服白衣ノ士少シク驚醒スルナクンバ、既ニ真宗ハ其利爪ノ片端ヲ打掛ケ、耶教亦処々ニ虎視眈々ノ

觀察ヲ配」っており、法華宗の布教師達はその勢力拡大に非常な危機感を抱いていた。

## (8) 二島の重要性―何故布教が必要か

### ① 二島の自然・社会状況

次に「紀行」のなかの最も中核的な部分、すなわち⑥「薩隅布教ヨリ起リタル鄙見ノ儘上申」と、⑦「鹿児島布教ニ就テノ情願」の検討に移ろう。

まずは二島の自然や社会状況を考察している。結果的に種子島に三十三日間、屋久島に二十一日間を費やしてしまったが、それほど広い地域にこれだけの日数を要したのはひとえに「航海便ノ稀少」と「陸路ノ艱難」によるという。つまり交通の便が悪く、人々の往き来が円滑にいかないから、このように長期間を要してしまったというのである。

また「両島共物産ニ乏シク（富ノ度ハ強チ低キニハ非ラサレトモ）、又海岸線ノ屈曲少ナキ為メ、交通運輸ノ途發達スルニ由ナシ」と分析する。

学校は「内地ト甚シキ差」なく、「社会的工芸的ノ文明ヲ催進スヘキ事物ハ殆ンド闕如」するために、「社会ノ大勢ニ後ル事甚シク、随テ彼等ノ惰眠ヲ覚醒スル事甚ダ難」い状態であった。

### ② 僧侶・信者の実態

このような二島において宗教や僧侶達の実態はどうであったか。中世以来両島において、宗教と言えば法華宗一宗に限られていたため、「進歩發達ノ要素タル比較ノ觀念ヲ欠」くことから、他の宗派との比較は事

実上不可能であった。そのため、法華宗と他の宗派との優劣を説き、法華宗の功德の厚大さを示しても、「下層ニハ感奮ノ効薄ク、僧俗共ニ誠ニ沈衰ノ極ニ居ルガ如」き状態であるという。

僧侶は人もいないために無理に頼まれて僧侶となっており、少しでも難しいことを言えば、すぐに還俗すると言いついで、愛法愛宗の心もほとんど無いようなものである。その学識も、「端書ヲ書キ得サルモノ多ク、御経ハ八品誦誦位ガ頂上ナリ、法門ハ勿論、信仰上普通ノ儀式行儀サヘモ違ヘル」事が多いと述べる。

無資格の人物ばかりが僧侶となっているので、檀家からも軽蔑されている。その具体例として一つは、葬式で使う紙花などは皆僧侶が造るもので、墓石なども僧侶が自ら手を下して切らなければならず、もしこれらを拒むようなことがあれば、檀家から叱責を受ける。まるで「檀家ノ僕隸」のように営々としてこれらを行っていた。

二つめは墓石を切り上げ、文字を彫り、一回の回向をなしても謝料として僅かに黒米一升を貰う程度であるという悲惨な話がある。

三つめは、死者が出た時、葬式の始めから中陰（四九日）忌迄の回向には七日ごとに行き、道路事情の悪い険難な道を二里も三里も行って勤めた暁に、報酬は僅かに米一升、金二銭とか十銭といった程度である。これらはその一例であって、他も推して知るべしであるという。

一方の信者はどうか。厳密に言えば、「信者ト云ヘキモノハ両島中ニ甚タ少ナク、法義ヲ知ラサルハ勿論」、「寺ト僧ヲ扶護スルノ志ニ薄」い。彼らに「布施寄附等ヲ説クモ怪ンデ」理解してもらえない。これは僧侶達が、「不学無氣力」で、しかも「法義上宗旨上ノ義務ヲ尽サ」ないからであると述べる。

そしてこのような状況は決して近來の事ではなく、数十年前、あるいはもっと遠い以前からあったことであると言う。

### ③ 廃仏毀釈が徹底された理由

次に廃仏毀釈が徹底された理由について話が進む。すなわち、典師（日典）を惨殺してしまったことに対して種子島氏の良心の呵責が甚だしく、恐怖的後悔をなし、身代をなげうって全力を傾けて小大名にも似合わず一二〇余りの多くの寺院を建立し、豊富な寺領を与え熱心に外護した。しかし、それでも心が静まらず、自ら出家して本源寺の開基となり、その後代々種子島氏より出家させたという。

そして結果として僧侶を甘やかすことに繋がり、彼らに在家を盲従させ、威張っている武士の上に僧侶を位置付けたことから僧侶の権威は甚だ高くなった。しかも公の場で腕力が強いことと乗馬が上手な事を僧侶の名誉とするような風潮があり、一般人が僧侶の驕横を嫉むことに繋がった。<sup>(46)</sup> これらが互いに原因と結果となって、腐敗を醸成すること長年に及んだ。そのため、一旦廃仏の厄に遭うと案外簡単に寺院は破壊されてしまったという。

宗教界において最も恐るべきものは、外觀が壮大で財力も充実しているにも拘わらず、その宗教の法を愛護する精神が欠乏することである。三島でもその痕跡が見られるという。

### ④ 浄土真宗の勢力拡大に対する危機意識

浄土真宗が盛んである屋久島は次第に同宗に奪い取られて、彼我の信徒の数は殆ど匹敵するほどまでになっているという。口永良部島は二、三年前に完全に浄土真宗の勢力圏内に入ってしまった。種子島の人々の性質は習慣を重んじ、殊に士族は浄土真宗を卑しむ風潮があるので、現

在のところまだ同宗の勢力は微弱であるが、なおも毎年二、三週間、島での説教を止めない。浄土真宗の三島における勢いはこのようであると述べている。

浄土真宗は西南の重要地点である鹿児島に本願寺という壮大な中央機関を設けており、薩摩・大隅二国では浄土真宗が独り舞台を演じつつある。三島を擁護するためには、法華宗としては鹿児島に一つの布教機関を設けて、浄土真宗の勢力を制限するべきであると提言する。

### ⑤ 三島恢復の方法

薩摩・大隅には法華宗の寺院が散在しており、檀家の子孫達は信仰のため、あるいは追遠喪祭のため法華宗復興を望む者が少なくない。殊に士族達も浄土真宗には同意していない。そこで鹿児島市に一つの布教機関を設立し、次第に手を延して近傍の恢復を計り、そうすることによって、一方では彼らが三島の応援者となり、一方では九州寺院の連絡がこの地に欠落していることを充填して、個々孤立の不便を解消させるべきであるとする。

この孤立という事は九州にある法華宗寺院の最も病処とするところで、既に他宗他派は個々の運動をせずよく相互に交通脈絡をなしていることから、苦勞せずに盛んである。翻って法華宗を見ると、九州に八、九の寺院、数十の出張説教所があるが、互いにその名を知らない。もとより交通がなければ、互いに布教上の応援をするような事は全然行われない。そのため往々にして他宗派の圧迫する所となる地が少なくない。よって今よりは堅固の団結をして、平常並に危急に備えなければならぬ。

三島の根本的復興を計るには、三島出身の僧侶を養成するべきである

と強調する。大陸育ちの人間では到底彼の地に永続する見込みはない。三島恢興に労が少なく功が多い方法はこれが唯一の良策であると言う。

三島では多少とも法華宗を慕って法を尋ねる人もあるが、人（僧侶）もなく書（本尊）もないため皆失望して止めてしまっているのである。今回の布教によって求法の志を増した者も多い。この僧侶の需要は三島だけに限らず、九州各寺院一般に所化（僧侶の弟子）の欠乏を来たし、法用にも手を焼き、説教所も派遣する僧侶がなく苦しんでいる。

法華宗へ好意を寄せる者がいることから、僧侶の需要は一定程度存する。僧侶の欠乏のために好機を逸することがあってはならないと述べ、僧侶を養成するために、簡単で易しく速やかに成し遂げ、しかも極めて少ない学資で修業できる学校を興すべきであるとする。そしてこの種の学校を九州の地に起す計画を述べ、この後実際に淡路に予備校を設立することになる。

以上のことは、十一月四日に屋久島楠川で長友太郎八が実子菊太郎（十四歳）を出家させるということがあったが、「一行皆歡喜セサルナシ、何トナレハ単二小僧ヲ得ル事ハ今日易キ事ナレトモ、三島恢復隆盛ヲ計ルニハ、其土地ヨリ人ヲ取ルニ非ラサレハ殆ンド永遠ノ見込立チ難ケレハナリ」と述べられた箇所とも通ずるものである。

#### ⑥三島布教の必要性

最後に三島布教の必要性に話しが進む。すなわち、三島は今日においては海中の絶域にあり、特段必要な位置にはないのだが、なおも多数の檀那が居ることを思えば捨て置くべきではない。なおかつ先師達が千辛万苦した遺跡であることを思えば、一衰一盛があっても改めて実際に見聞することが大切であると述べる。

#### ⑦鹿兒島布教についての情願

最後に鹿兒島布教について、以下の四点の情願を述べる。

(イ) 鹿兒島に説教所設立の希望がある。ここには相当数の信者があり、本山の庇護を願い出、宗祖の木像一鉢・本尊一幅・打磬等の下付を願う。

(ロ) 薩摩郡川内町に四十人余りの信徒を糾合し、一説教所を起こすので大本尊一幅の下付を希望する。

(ハ) 川添秀妙は今回の巡回に非常に尽力したので「少講師」くらいに任命していただきたい。本宗に尽くした功労は多大であり、同人は希望の人物であるので山議においても十分に奨励していただきたいと述べる。

(ニ) 本源寺住職山田永叔は六十日間布教に随行し、諸般尽力の斡旋を行った。その功労もまた賞すべきものがあるので、多少の賞典を希望する。「集解卒」くらいに推挙しては如何かと思うと述べる。

特に(ハ)と(ニ)に関しては、三島回復の策は有為の他国人を用いるよりも、むしろ萎え衰えた彼ら（現地人）を奮発せしめて、三島のこの上ない衰えを救う事が、手近で便利な方法と考える旨述べてその意義を強調している。

#### おわりに

鹿兒島全体で見れば、廃仏毀釈の前と後で仏教の勢力は全く異なる。すなわち、中世から近世にかけては曹洞宗と真言宗が中心であったが、明治九年以降現代に至るまで浄土真宗が中心となっている。

一方、二島では廃仏毀釈で一時的な断絶はあるものの、中世の状況が

ほぼそのままの形で現代まで引き継がれている特徴的な地域と言える。

それは本山である本能寺と本興寺が二島地域の重要性を認識していたからである。その重要性とは、中世から近世において、鉄砲・南海の産物、武士・僧侶、情報などが、鹿兒島の島津氏を経由せず、二島と畿内の間をダイレクトに行き来できたことである。これは種子島氏が有していた、中世以来の独自の政治的立場が島津氏からも認められていたからに他ならない。

廃仏毀釈の後、本山は何故この地域を重要視したのであろうか。それは、近世までの信仰の歴史が長く、信者の数が依然として非常に多かったからであった。そのため、現代においても二島における法華宗の宗教学法人数は最も多くなっている。それは近世までの民衆の中に法華宗がかなりの程度根付いていたからであらう。<sup>(47)</sup>「紀行」には法華宗僧侶や檀家達の在り方を批判する箇所が見られたが、やはりこの点にこそ二島の地域的特色が顕著に認められるのである。

反対に二島以外の地域では、旧来の仏教がそれほど民衆の間に根付かず、かくれ念仏として浄土真宗の勢力が強かった。そのため明治九年の信教の自由が布達された後、燎原の火のごとく瞬く間に同宗が県内中に広がっていったのであろう。

## 註

- (1) 法華經二十八品の前半十四品を迹門、後半十四品を本門と呼ぶが、日隆(一三八五―一四六四)はこの内本門十四品のなかでも從地涌出品第十五・如來壽量品第十六・分別功德品第十七・隨喜功德品第十八・法師功德品第十九・常不輕菩薩品第二十・如來神力品第二十一・囑累品第二十二の八品を特に重視する立場をとった(『兵庫県史 第三卷』四四四頁、兵庫縣、一九七八年・「日隆門流」、日蓮宗事典刊行委員会編『日蓮宗事典』日蓮宗宗務院、一九八一年)。彼の系統を日隆門流・八品派と呼び、明治九(一八七六)年に本隆寺派・本成寺派と合同して法華宗、同二十七年別(一九四一)年に本隆寺派・本成寺派と合同して法華宗、同二十七年別立して法華宗本門流となった(高木豊「日隆」、今泉淑夫編『日本仏教史辞典』吉川弘文館、一九九九年)。同五十六年当時の所属寺院数はおよそ三六〇余ヶ寺で、教会は一四〇ヶ所を数えた(前掲『日蓮宗事典』。種子島・屋久島(以下「二島」と略記)の法華宗寺院の殆どはこの本門流(以下「法華宗」と略記)に属する。

- (2) 『鹿兒島県宗教法人名簿』鹿兒島県総務部学事文書課、一九九八年。この年が終刊で、以後本書の刊行はない。猶、同書は「2 系統別、宗教別法人総括表」と「4 宗教法人宗派別、市郡別集計表」では「法華宗(本門流) 二十二、本門法華宗六」とするが、「6 仏教系宗教法人」では両者をまとめて「法華宗(本門流) 二十八」としている。

- (3) 宗教法人数ではこのような数字になるが、信者の数では浄土真宗が法華宗を上まわっているという。星野元興「過疎地域における寺院経営―種子島・信楽寺を事例として―」(『地域政策科学研究』第十一号、鹿兒島大学

大学院人文社会科学研究所地域政策科学専攻、二〇一四年。

(4) 厳密に言えば、明治二年六月十七日に島津忠義が太政官より鹿児島藩知事に任命されてから(『鹿児島県史料旧記雑録追録八』八八二号)以降、同四年七月に廢藩置県で「藩」が消滅するまでを「鹿児島藩」と呼び、これより以前は「薩摩藩」と呼称すべきであるが、煩雑となるので本稿では「薩摩藩」で統一する。松尾千歳「藩の呼称について」(『鹿児島歴史研究』第五号、二〇〇〇年)を参照。

(5) 市来四郎談話「薩摩にて寺院を廢し神社を合祭せし事実 附六節」(『史談速記録』第十三輯、一八九三年)。

(6) 宮脇さゆり「中世種子島氏における法華改宗について」(『隼人文化』第二六号、一九九三年)。

(7) 年未詳四月十八日細川晴元書状(藤井学・上田純一・波多野郁夫・安国良一編『本能寺史料 中世篇』一二九号、思文閣出版、二〇〇六年)。併せて川添昭二「日蓮宗」(川崎庸之他編『体系日本史叢書18 宗教史』山川出版社、一九六六年)も参照。

(8) 屋良健一郎「中世後期の種子島氏と南九州海域」(『史学雑誌』第一二二編第十一号、二〇一二年)。

(9) 吉井敏幸「種子島の寺院について」(『元興寺文化財研究』第四九号・第五十号、一九九四年)。

(10) 藤井学・波多野郁夫編『本能寺史料 西国末寺篇』解題五五〇頁、思文閣出版、一九九三年。

(11) 「本能寺法脈伝燈歴譜年代調」(藤井学・波多野郁夫編『本能寺史料 古記録篇』四六号、思文閣出版、二〇〇二年)。

(12) 『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ四』八六二の一号。

(13) 『同右』八六二の二号。

(14) 『同右』六七五頁。

(15) 『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ九』一四八頁。

(16) 『同右』一五〇頁。

(17) 『同右』一七四頁。

(18) 『同右』一九五・一九六頁。以上述べた種子島の廢仏毀釈については、拙稿「鹿児島県の廢仏毀釈について」(『祈りのかたち〜中世南九州の仏と神〜』鹿児島県歴史資料センター黎明館、二〇〇六年)を参照。

(19) 「両山歴譜 日唱本」(『本能寺史料 古記録篇』五四号)。

(20) 前註(11)。

(21) 薩摩藩における廢仏毀釈の完了は通常、明治二年十一月と言われている。例えば、『島津氏正統系図』・『鹿児島県史 第三卷』(一九四一年)など。しかし、『鹿児島県地誌』(『鹿児島県史料集』第十六輯・第十七輯)には同三年に廢寺になった寺院が少なからず見え、同四年廢寺の寺院までである。この矛盾をどのように考えるべきか現在のところ成案を持ち合わせていないが、今後の史料の増加を待つてからの検討課題としたい。

(22) 『鹿児島県史料忠義公史料第七卷』八九〇頁。

(23) 『本能寺史料 古記録篇』解題六一七頁。

(24) 前註(19)。

(25) 開教百年史編纂委員会編『本願寺鹿児島開教百年史』本願寺教区教務所鹿児島別院、一九八七年。

(26) 宮本常一・原田伴彦・原口虎雄編『日本庶民生活史料集成』第十二卷 世相二、三一書房、一九七一年。

(27) 原口泉・丹羽謙治他編『薩摩藩文化官僚の幕末・明治 木脇啓四郎』萬

留」―翻刻と注釈―」岩田書院、二〇〇五年。

(28) 『南種子町郷土誌』一〇四九―一〇五〇頁。

(29) 『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ九』二二四頁。

(30) 松井孝純「屋久島における法華宗の廃仏毀釈と復興」(『桂林学叢』第十号、一九七八年)。

(31) 『西之表市百年史』四〇八頁。

(32) 『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ九』二二五頁。

(33) 『西之表市百年史』四一〇頁。

(34) 『鹿児島県史料旧記雑録拾遺家わけ九』二二九頁。

(35) 『南種子町郷土誌』一〇五〇―一〇五一頁。

(36) 前註(31)。

(37) 前註(30)。

(38) 『本能寺史料 古記録篇』解題六一七頁。

(39) 『本能寺史料 西国末寺篇』三六九号。

(40) 『本能寺史料 古記録篇』二四号。

(41) 前註(11)・(19)。

(42) 「本能寺薩摩・大隅・日向三ヶ国末寺帳」(『本能寺史料 西国末寺篇』三七七号)。

猶、種子島で作成された『神社仏閣其外旧跡等札帳』・『種子島方角札帳』(『郷土資料集七 種子島方角札帳・神社仏閣其外旧跡等札帳』西之表市立図書館、一九八五年)では、二石とする。

(43) 実際の信者数は恐らくこれを上まわるものと思われる。例えば、明治三十年十二月に本源寺住職岩坪永順が本山に提出した檀方戸数調(前註(39))によると、種子島に一六〇九戸、屋久島に五六九戸、合計二一七八戸の檀方があったことがわかる。一戸あたり三人いたとすれば六五〇〇人

を、四人で計算すれば八七〇〇人を上まわることになる。

(44) 前掲星野「過疎地域における寺院経営」。

(45) 法華経本門の従地湧出品第十五から囑累品第二十二に至る八章を本門八品と言う。前註(1)参照。

(46) ここで述べられている僧侶と、「②僧侶・信者の実態」で見た僧侶は著しく内容が異なる。②は愛宗愛法精神がなく学識も低い僧侶をいったものである。あろう。

(47) 廃仏毀釈が徹底された原因の一つに、かくれ念仏を信仰する民衆が多く、寺院との結びつきが弱かったからという説がある(原口虎雄『鹿児島県の歴史』二二八頁、山川出版社、一九七三年など)。二島の場合、廃仏毀釈は徹底して行われたが、その後浄土真宗の進出にも拘わらず、一定程度の法華信者が存続していたのは、近世までの民衆と法華宗との結びつきが強かったからと推測される。

(くりばやし ふみお 本館調査史料室長)